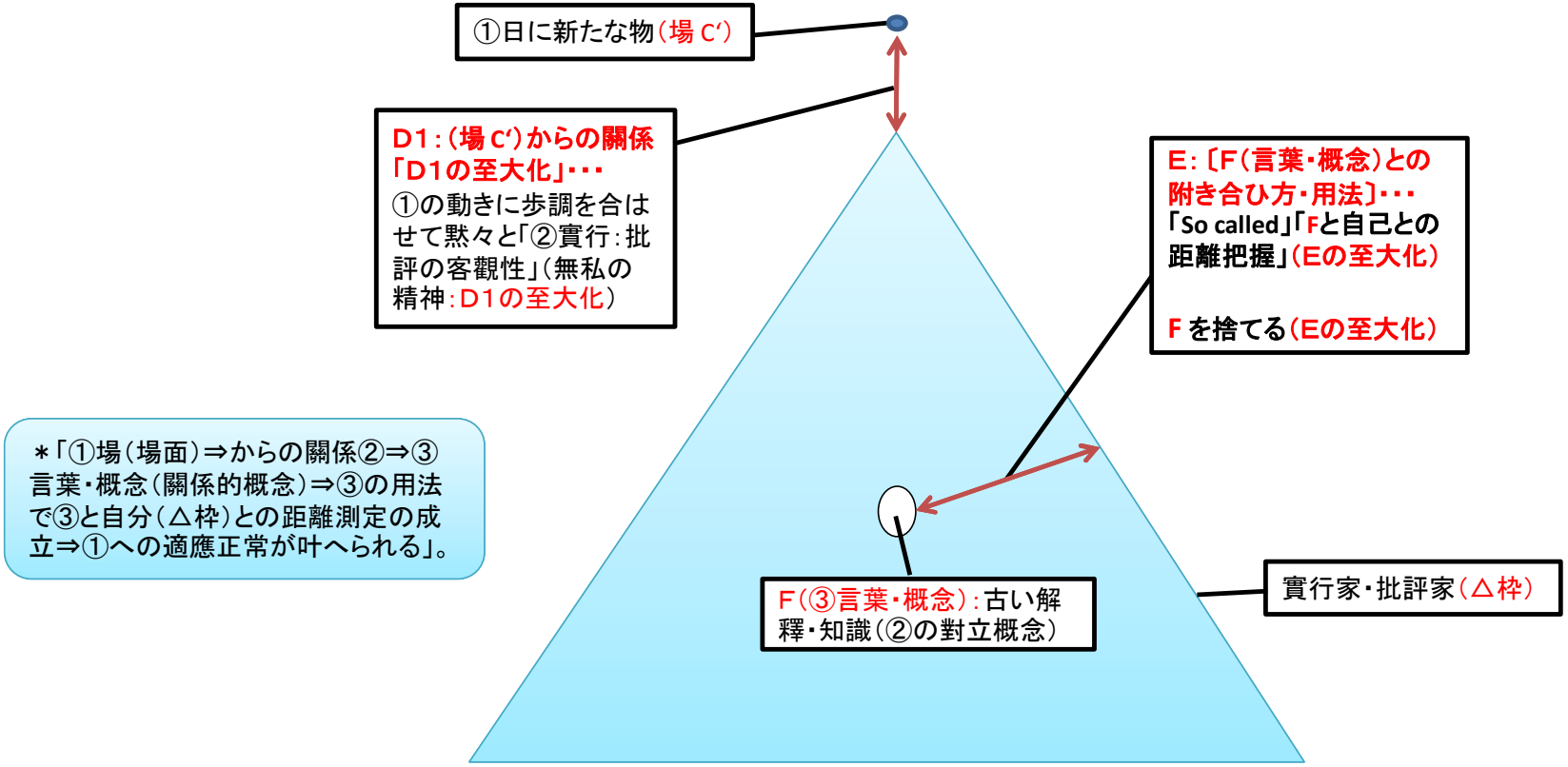
《難解 小林秀雄には 恒存の關係論が最適》
《小林秀雄評論 『無私の精神』（感想Ⅵ）》
＊①日に新たな物（場 C′）⇒からの關係：①の動きに歩調を合はせて黙々と「②實行：批評の客觀性」（無私の精神：D1の至大化）⇒③古い解釋・知識（②の對立概念：F）⇒③を捨てる（Eの至大化）⇒實行家・批評家（△枠）：①への適應正常（D1の至大化）。

＊「有能な實行家（△枠）は、いつも自己主張より物（場 C′）の動き（D1）の方を尊重（D1の至大化）。現實（と言ふ物：場 C′）の新しい動きが看破（D1の至大化）されれば、直ちに古い（D1の至小化）解釋や知識を捨てる（D1の至小化）用意のある人だ」⇒「物（場 C′）の動き（D1）に準じて自己を日に新たにする（D1の至大化）とは一種の無私（D1の至大化）である」⇒「批評の客觀性（D1の至大化）といふものも、この種の無私（D1の至大化）から發するものである」。
＊「批評家（△枠）の知惠（D1の至大化）は、科學者（△枠）のものより、はるかに實行家（△枠）の、生活人の知惠（D1の至大化）に近い」⇒「理論（F）の厳密（Eの至大化）より、行動（D1）の微妙（D1の至大化）を指す」（『無私の精神』：全11P280）。